

能楽雑感から その4

挨拶、謡うときの姿勢、謡と季節、
番組内での重複忌避、櫻川のワキツレ、
曲名の呼称、落書き、謡本の捲り方、
ワキの語り

～ 挨拶 ～

能は礼儀を重んじる武家社会で、守られ、維持されてきたものですから、如何なる場合でも、挨拶を欠かすことはありません。しかし、挨拶の詞が些か気になっています。

例えば私自身を例にとると、素謡なり、仕舞なりの地頭を勤めた後、鏡の間などで挨拶をするときに、「有難うございました」と言うのが通例になっています。長い間、違和感なく続けてきたことですが、先般の会のときに、ふと、これで良いのかしらと疑問が湧きました。

プロの主宰する会にアマチュアが出演したときはどうかと言うと、例えば私が舞囃子を舞い終えて、切り戸口で挨拶をするのですが、このときに師匠が先ず「有難うございました」と発言します。

これは、私に対して「高い会費をお支払い下さいましたが、それに見合うご立派な舞いをなされました」ということでは絶対になくて、助演の地謡と囃子方の労をねぎらうための詞と解釈しています。

この場合、師匠と私とは、プロとアマの立場が異なるとは言え、身内同士のようなものですから、全く違和感がないのですが、アマチュア同士の場合、これで良いのかという疑問を持たざるを得ないのです。

確かに。「私の拙い地頭に、良くぞ付いて下さって、お謡いになり、或いは舞って下さり、感謝・感激しております」という気持ちが、いつものことながらありますし、時には、「私のミスでちょっとした混乱がありました。ごめんなさい」と申し上げたいときもあります。

他方、この場で言うべきことではないかも知れませんが、「こちらが折角一生懸命に謡っているのに、貴方の謡い、或いは仕舞は何でミスが多かったのよ」と、ののしりたくなる時もあります。このときも、心中はさておき、口では「有難うございました」と言っているのです。

「有難うございました」と言うべきなのは、謡いのお役の方であり、仕舞を舞った方が言うべきなのでしょうし、若し私が言うのならば、「有難うございました」ではなくて、「ご苦労さま」或いは「お疲れ様」が妥当な詞であると思うのですが、如何なものでしょうか。

～ 謡うときの姿勢 ～

仕舞に於いては、姿勢が重要なことは言うまでもありませんが、素謡においても、姿勢は極めて大切なことです。

素謡の場合、殆どが見本ですから、どうしても前かがみの姿勢になってしまいますから、そのことは、ある程度はやむを得ないとしても、前傾姿勢を綺麗に見せる工夫が必要です。

心掛けて頂きたいのは、前景のときは腰を傾け、首を曲げないこと。つまり、腰の基部と後頭

部が一直線になるように心がけて欲しいのです。

この他、注意して頂きたいのは以下のようなことです。

- ① 出演中にキョロキョロしないこと。目の動きは見所からみると予想以上に目立つものです。
- ② 本をめくる時は右手で。左手で、しかも、唾をつけてめくるのは最低です。
- ③ 大ノリの謡のときに、左手でリズムを取らないこと。ひどい人は、扇を持った右手を浮かせて上下に振ったりしています。
- ④ 入退場のときの振る舞いも大切です。せこせこしないで、鷹揚に。

白謡会のHPでも、会の都度、中山さんが撮影する写真が多数掲載されますので、素謡のときでも、油断がなりません。

～ 謡と季節 ～

我が国の変化に充ちた季節と関係があるからなのでしょう、伝統的な日本の文化には季節感がつきものです。能においても、俳句ほどではないにしても、季節と切り離せないものがかなりの比率であります。

秋の菜摘を謳った「求塚」のロンギ、蕭条とした冬の詩の「芭蕉」のクセなど枚挙に尽きません。ですから、番組編成のときには、曲の季節を考慮せざるを得ません。

具体的に言えば、10月の会に、「櫻川」は相応しくなく、5月の番組に、「井筒」は如何なものかと思えます。(本音を言えば、どうだってよいとは思っていますが・・)

その点、我が観世流大成版は親切なこと限りなく、それぞれの本に季節の該当月が表示されていますし、百番集に及んでは、一年の月別の曲目一覧表まで織り込まれています。

但し、どう理解したら良いのか分らないのは、表示されている「月」は陰暦であるということです。少なくとも季節が一月はズレていることを念頭に置くべきで、曲を選ぶときには、太陽暦に置き直した方がよいのではないかと常々思っています。

「大原御幸」は謡本では4月になっていますが、明らかに状況は新緑の季節、9月と表示されている「松虫」は、太陽暦としては、まさに時期尚早と言わざるを得ません。

また、「無季」に分類されている曲目の中にも、私の主観かも知れませんが、季節感に充ちたものがあります。

例えば「葵上」は、賀茂の祭(葵祭)での車争いを彷彿とさせるものですから、この祭りの開かれる時期(5月15日)を連想しますし、「山姥」はいかにも雪が降りしきっている初冬の情景を思わせるところがあります。

～ 番組内での重複忌避 ～

今週の土曜日は、かつての勤務先の会社の地方拠点で組織された謡曲部の連合会(年一回、各地持ち回りで)が、天津で開催されるので、横浜や川崎の仲間たちと参加することにしていますが、この番組で、私の舞う予定の仕舞「花筐・狂」と全く同じ仕舞が、しかも私の舞う、直前に他の人によって舞われることになっていました。

私が気づいたのが遅すぎたので、番組を変更することが出来ませんでした。本番では「花筐・クセ」に変更してもらい、当方の申請ミスであったことにしてもらおうかと考えています。

はっきりした理由は分かりませんが、能の会にしても、素謡・仕舞の会にしても、演じられる曲目の重複を嫌うこと甚だしいものがあります。

素人の同好会でも、例えば三菱グループの「菱水会」などでは、この点極めて厳格で、そのため、各社からの希望に重複があった場合は、これを差し止めて調整をしますから番組担当は大変な苦勞をします。

この重複ということに関していえば、素謡同士とか仕舞同士の重複を避けることは言うまでもありませんが、素謡と仕舞の重複も本来はあってはならないとされています。(白謡会の場合、出演曲目が極めて多いため、この種の重複がままありますが、そのような場合でも、仕舞で演じられる部分〜クセなど)を素謡では省略するように図らっています)

素謡だけに限っても、3番目ものが2番続くときは、「現在物」と「幽玄物」ものに分けるとかの工夫を要しますし、謡の順序も5番立てに準拠して、変化を付けなければならないと言われていています。

以前、素人だけの勉強会(師匠の弟子たちの集い)の番組を、師匠に見せたところ、「尉の呼びかけで始まる曲が、続けてあるのは好ましくない」との指摘を受けたことがあります。

重複を禁ずる理由を私なりに推測すると、次のようなことが考えられます。

- ① 反復、重複、シンメトリーは日本人の美的感性にそぐわない。
(俳句、和歌、或いは作庭の技法が良い例)
- ② 伝統的に、観客は演者よりも上位者であるから、観客を飽きさせるような要素は全て捨象しなくてはならない。
- ③ 加えて、同じ仕舞の演目を並べるのは、演者を競わせることになり、品位を欠く。

以前、小欄(?)で書いたような気がしますが、「素謡」だけでも、絶対に同じ番組に載せてはならない組み合わせが3組あります。謡の節と文句が重複する部分があるから、所謂、食べ合わせが良くないのです。

即ち、「葵上」と「通盛」、「景清」と「大仏供養」、「吉野天人」と「右近」ですが、最初に掲げた組み合わせはともかくとして、後の二つの組み合わせは、瓜二つの顔ながら黒子一つ有る無しの違いがあるのですが、さて、どこでしょうか、時間のあつたときに調べておいて下さい。

～ 櫻川のワキツレ ～

最近、謡会の番組で、季節感があまり感じられなくなったような気がして、昨日の企業グループの謡会で、賛助出演してくれた能楽師に尋ねたところ、「確かにそのような傾向があるようです」と、見解を述べてくれました。

これは、催会する場所での都市化が著しくて、季節の移ろいを身近に感じられなくなったり、食材が季節を問わず出回るようになって、「旬」を尊ぶ機会が少なくなったことが背景にあるとみえています。

しかし、そうは言っても、今頃の季節に「紅葉狩」や「女郎花」は、そぐわないように思いま

すし、逆に、「西行櫻」とか「桜川」は出番なのでしょう、事実、いろいろな会でこの両者の表題を目にします。

ところで、この「桜川」のワキツレですが、能では3人のワキツレが登場します。即ち、人買い、ワキの従僧、里人です。仮にこれを順に、A、B、Cとしましょう。

これが素謡となると、謡本に記されているように、AとCしか登場せず、謡う役割は2人だけなので、能ではワキとワキツレの合吟であるべき「次第」と「道行」は、ワキの独吟となります。

ここまでは大方の方が知るところですが、小規模の謡会などで、前後のワキを同一人物が謡うことがままあります。この時のCの従僧を、ワキツレのお役の人が謡って良いのか否かになると、少しややこしくなります。

全てを合吟とするならばどうでも良いのですが、道行では、打ち切りのあと「返し」がありますので、これをワキツレのお役の人が、独吟すべきかどうかということになると、話はこんがらがってきてしまいます。

～ 曲名の呼称 ～

今日は久しぶりに師匠に稽古をつけてもらいました。この秋、師匠主催の会（渋谷のセルリアン・タワー舞台）で舞う予定の、仕舞「女郎花」でした。この曲の名前は、ご存知、「おみなめし」ですが、能を趣味としている人以外にはちょっと正確な呼称を言えないのではないかと思います。

たかが曲の名前ですし、同じ能楽でも流儀によって呼称が異なったりしますから、それほど神経質になることもないかとは思いますが、されど何とやらで、正確な呼び方を心得ておいた方が良いにこしたことはありません。

先ず、字面からして読みにくい曲ですが、謡を趣味として始めた人なら、「善知鳥」とか、「熊野」は、問題ないとしても、上演頻度の少ない、「大社」（おおやしろ）、「大會」（だいえ）、「春榮」（しゅんねい）などは、ちょっと考えてしまうことでしょう。

似たような例で、間違えやすい、或いは読みにくいものとしては、「班女」、「六浦」、「龍虎」などがあります。「葛城」も難しく、「かつらぎ」、「かづらき」、「かづらぎ」の3通りの読み方があるので一苦勞ですが、これは謡さえきちんと本を見ながら習えば、どうということもありません。

ちょっと、困ったなと思ってしまうのは、謡歴10年にもなり、準九番、九番謡もかなりこなしたベテランに近づいた人が、「卒都婆小町」を、つい口癖でしょうか、「そとばこまち」と発音してしまうことです。

～ 落書き ～

他人様の謡本を覗き込んでみると、余白に何やらいっぱい書き込みをしている人が少なくありません。

これは好みの問題であると考えているので、その是非については論じるつもりはありませんが、

私自身はといえば、ほとんど謡本に書き込むことはしていません。書き込みをすると本が汚されるような気がしてしまうからです。

私も、入門して3、4年の頃は、師匠に指摘されたことを、時折、書き込んでいました。ただ、概ね小さい字で書いたので、この年齢になると、謡いながらそれを読もうとしても判読できないので、折角書いたメモも全く役に立っていません。

しかし、若いころは、師匠に指摘されたことや、自分で学んだことは、別に書かなくても記憶してしまいますから、今になっても、克明に思い出すことができます。

そうは言っても、今なお、書き込みをすることがあります。それは、次のページで2行以内に地謡が始まる場合です。

実例で言いますと、「弱法師」の5丁表の最後の余白下部に、「3行目より初同」と落書きをしてあります。これは、めく捲ったらすぐに扇を取りなさいと言うことを意味しています。つまり、地謡で扇を取る頃合いの指針をメモしている訳で、これは謡うときの居住まいを整える意味でも効果があります。もっとも、謡をそらんじていれば、そのような書き込みが不必要なことは言うまでもありません。

また、多くの人に、書き込みを奨励したいのは、お役の謡の詞章がページをまたがる場合です。謡っている途中で次のページに移る時に、ページがめくり難くて、謡に間が空いてしまうケースをしばしば耳にしますが、これは、折角の謡いを稚拙なものにしてしまうことになります。

身に覚えのある人は、こうしたミスの予防のために、次のページの一行目の詞章をメモしておいたら如何でしょう。

～ 謡本の捲り方 ～

私が、謡を習い始めた最初に教えられたのは、見台に向かって座り、謡うときの作法でした。従って、これが身体に染み込んでいて、当然のごとく振る舞っていますが、時々、同好会や、時には玄人主催の素人会でさえも、おやっと思ふ場面に出くわして、のけぞってしまいそうになります。その中で、一番留意して欲しいと思うのは謡本の捲り方（本人が謡っている場合）です。

正しい作法は、斜めに構えて先端を板に着けていた扇を膝に乗せ、この時に左手で一旦扇の先端を押さえ、右手を外して、本を捲り（この時に、指を舐めたいのを必死に我慢する）、再び右手で扇を握り、左手を放して当初の構えに戻します。

一番多い不作法は、横着をして左手で捲ること、次に、捲ろうとしてもなかなか思うように捲れないので、コンチキショーを表情に表わして、必死の形相になること。大事な個所で丁が変わるときは、予め折り目をつけるなどして、捲りやすいようにしておきましょう。

もう一つ、謡っているときに構えた扇は、途中で動かさないことが肝要ですが、つい夢中になって、動かしている人がいます。

特に、剛吟の「クリ入り回し」などでは力が入りやすく、思わず扇の先で山谷を描いている光景がよく見られます。（扇だけでなく、顎まで山谷をつけたり）

三つユリや本ユリのときに、扇の先端が宙に浮き上がって、波打っている場面は珍しくありませんが、これも自制したいもの。

左手も大事です。何があっても左膝頭に不動の位置で置いておかなくてはなりません。大乘のときに、拍子に合わせてちょんちょんと膝頭を叩きませぬように。そうしたい気持ちはよく分かりますが・・・

～ ワキの語り ～

来月の、師匠主催の会（颯々会）は、今年から観世能楽堂での開催でなくなりましたが、今年には渋谷のセルリアン・タワーの舞台になりました。

私にとっては、昭和43年以降、毎年欠かさずに踏んできた観世の舞台に縁が無くなることに、一抹の寂しさが無いでもありませんが、これまでは、舞囃子主体の番組が素謡主体の会に代わって、それなりに喜んでくれる会員も多いのではないかと思います。

私自身も、久しぶりに、素謡でのお役が回ってきました。「攝待」のワキです。

能の声楽的表現としての言葉即ち「詞」（ことば）は、技術的にも、感覚的にも、「謡」以上に難しいのですが、その中でも、「語」（かたり）には、神経を集中せざるを得ません。

その「語」の中でも、「ワキの三語り」（という言葉があるかどうか知りませんが）とも言うべき、難易度の抜群に高いのは、「隅田川」、「藤戸」、「攝待」です。

演能の中で「語り」と言えば、間狂言の語りが典型ですが、上記のワキの語りは、いずれも、狂言の語りに準ずる、重要な役割を持っています。（勿論、能は言うに及ばず、素謡においても、シテを引き立てるためのワキの語りですので、シテの位を超えてはならないことは言うまでもありません）

しかし、ワキであっても、前記の3曲については、それ自体「独吟」の対象になるくらいですから、かなり集中力と頑張りが必要です。言い換えれば、決して芝居掛かってはならない能であっても、この3曲については、やや大げさな表現が許されそうです。

そうは言っても、この3曲にはそれぞれ留意しなくてはならないポイントがあります。それは、誰が誰に向かって、語っているのかということです。

即ち「隅田川」は、船頭が船の乗客に対しての語りですから、非業の死を遂げた梅若丸に同情はしているものの、感情移入は控えめに、やや淡々と謡うべきですし、「藤戸」は自分が殺した男の母親に対して、殺戮のときの有様を語りますから、多少のうしろめたさ（これはあくまでも現代的解釈かも知れませんが・・・）を感じながら、それでも、支配者としての矜持と自信を込めて堂々と語らなくてはなりません。

それに引き換え、「攝待」では、弁慶が、戦死した佐藤継信の母親に、継信の戦死の有様を聞かせるのですが、最初は、心静かに語り始めても、次第に戦友の死に際の情景に引き込まれ、心ならずも激して、涙しながら語っているとみて良いでしょう。

従って、語りの興奮度は、「隅田川」、「藤戸」、「攝待」の順で高いものとなります。

とは言え、興奮のあまり、決して、語りながら顔をしかめたり、肩を怒らせたりしてはならないのですが・・・